

雪彦天南星発見當時の思い出

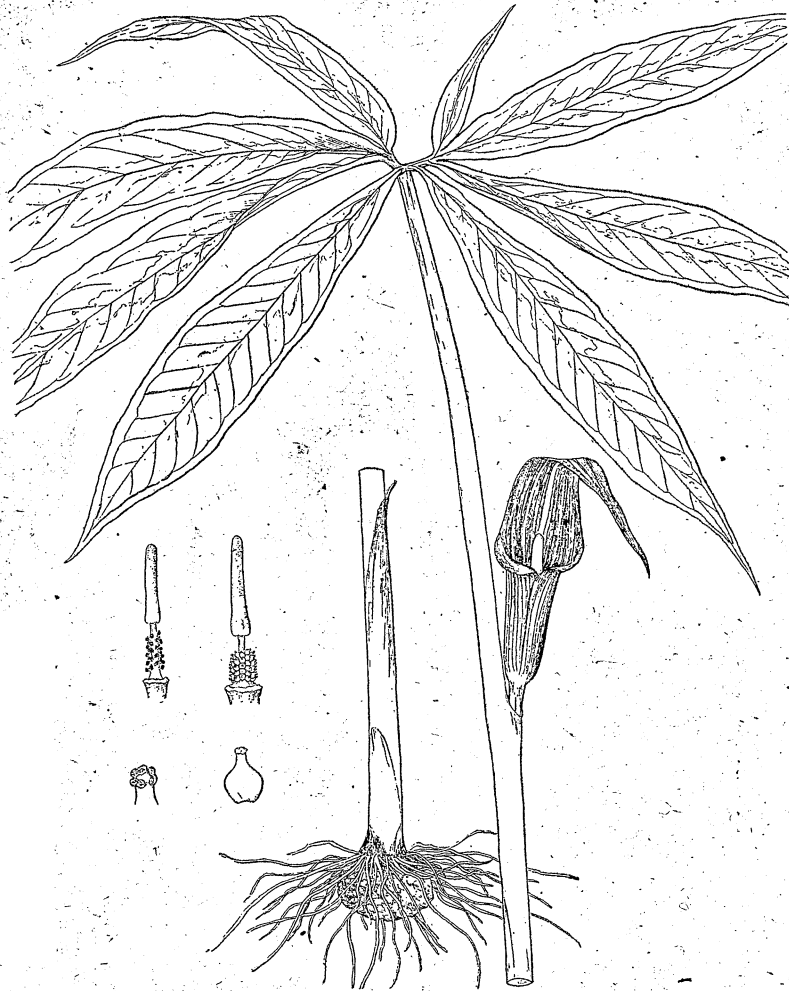
室 井 綽

今年から17年も前の昭和7年、私の16才の春の5月中旬、今から思うと私の採集狂の中心時代のことであつた。母を5才で亡くして父と弟の3人で淋しい生活をしてきた春の5月18日の夕方、私1人で夕飯をこしらえ、ついでに雪彦山に明朝出発するために握り飯をつくり、中に梅干を入れて3回の食糧を準備して明日の大発見を祈りつゝ床についた。

その杉林の小径を通つて雪彦神社の社務所につく一寸手前で夜明けの杉林の暗い中から白い奇麗な花がゆらゆらゆれて私を迎えてくれた。下りて早速、數本を採集して見たが名前の判らぬ植物だ、後で田代先生に鑑定して戴いてシエンジュギクと教えられた。この初印象から頭の悪い男乍ら今でもはつきりと記憶している。この辺で犬が何匹も出て道を尋ねる私に吠えつ

た。このこわさから力のかぎり自轉車のペダルを踏んだのもこの時の思い出だ。そして社務所にたどりついて、柏尾氏から親切に道を教えられ無事目的を果すことが出来た。

木馬道の終点を少し行き、橋の手前から左に折れて、山道と登山道の分岐点との辺をよく注意して教えて下さつた。本年6月、北村先生等と再度の登山で生々と当時のことが呼び起こされた。出雲岩の附近で美しい黄花をつけた。石南を小さくした様な植物に出会い随分珍らしくて、何本かを胴入れに入れてこれらあとで田代先生からヒカゲツツジだと教つた。この山で私には一番魅力のある植物であつた。其の他美しく、ほれほれされたものを拾うて見る



採集に出る楽しさから午前2時には目が醒めた。昨夕つくつた握り飯を胴入れに入れ野冊に新聞紙をうんと詰め自轉車につけ草木も眠る丑満時に小さい胸を跳らせ乍ら自宅を踏つた。

初めての雪彦山、1枚の地図を頼りに山に向い、姫路を過ぎて雪彦部落についたのは夜の明け方であつた

と、ウスギヨウラクの珍奇花が群生する、花は他のものと異つて筒状鐘形で和名の示す様に薄黄色、一寸ツツジ類と思えぬ臭床しい花で、丁度谷間のつゝましい娘の花言葉になりそうだ。本種と相前後した陰地にはツツジ類であり乍ら余程毛色の変つた梅花ツツジが見られる。花は前年枝の先端について白色、一寸梅の花

を思わせる。可憐な花が腦裏から離れない、アカヤシ
ノの群落も当山の代表的なもので壯大優美な桃色の
大團をつくる。開花時には山容を一変しなくては
おかない。他に雪彦山の花嫁さんが頬紅をつけて
頭をうなだれた様なベードウダン、軟い觸感と
繊細な葉の付き方とが、人の手を思わせるよ
うなナンキンナカマド高山植物の代表者と誰
れでも思わせるホンシヤクナグの大群落など、
これ等は無論総てが名称がしらぬので何本も
胴乱につめた。頂上に達するまでに5回も胴
乱から野冊に移したことを覚えている頂上裏手
でホンシヤクナグの大樹を見て、これまで高
山植物とばかり思い込んでいた私は、大きさと
くさに驚かされた。さては天下の名山だと
颯然と直してみた。柏尾氏に教えられたま
まに右折して谷川の方へ下りて、その辺で黒
紫色の花をつけた。葉脈に沿つて白斑のある
天南星科のものに出会い、早速数本を採集し
胴乱に納める。これが新種のセツピコテンナ
シヨウであつたわけだ。

少し下りると谷川の辺に出る。荷物を下して
昨夕つくつた握り飯を出して谷川の水を飲
んで中食をした。この山は今までに登つたこと
のない、よく茂つた山である。とうとうと流
れる谷合いで寒さと子供時代に聞かされた
幽霊や怪物が今にも流水の中から、いど
かよりさうな谷間であつた。この度の採集
会でも、北村博士、田川博士を初め私の、こ
の思い出の谷合いで過ぎた少年時代の
大望を唯一呼び起こし笑をたぐえつ
た中食をした。

中食を終えると早速走り廻りてサンザン
採集した。夕方5時過ぎ、事務所について
野冊に移し、多数の獲物を自転車につけて
、北村郷有年の我家をさしてペタルを踏
んだ。

夜の10時過ぎ拙宅についたので野冊から
採集品を出して夜の更けるのも忘れて標本
の形を直し新聞紙の間に挟みかえ、漬物
用の石から石臼まで動員させて腊葉の重し
とした。

10日許ると昔葉が出来たので、名前を
教わるため同一標本を集め同一番号をつけて、
何時も指導を

けている、京大、故田代善太郎先生宛に
発送した。その中のNo.37のみは「?」を
つけて來られた。その中、京大の中井先生
が鑑定して下さいとどかの理由で葉書で
「No. 37 は Arisaema kiusiana Makino (?)
ヒメウラシマソウ(?)標本が少いので鑑定
不能につき再度採集されたし、田代」の返
事を得ていた。

上のことがあつて10余年経た。戦争末期
の頃に田代先生から、雪彦山の天南星採集
の依頼状が再度到着した。然し敗戦前後の
食事情や交通機関の障碍は想像以上であつ
たのでつい、実行することが出来ず、のび
のびになつてゐるうち、田代先生は昭和21
年2月10日、天南星の解決を見られず他
界されて了つた。

処が昨年11月14日、北村先生に印南郡
大塩の野地菊の御指導を御願ひした所、大
塩の採集中、先生から思いがけぬ、雪彦
山の天南星の話に移り、明年は是非、行
つて採集研究したいとのことで、本年植
物採集会を催した次第でした。幸ひ私が4
本を採集し、北村先生に差し上げた所、
新種の由にて、植物分類地理、14巻1号
に Arisaema seppikoense Kitamura 雪彦
テンナシヨウと御命名発表になつたもので
ある。

これで永年の無籍者の登録も済み天下
晴れての行動も許されるわけで助産婦役
の私も、この子より健に繁茂成長し何
時までも雪彦山の代表名花として生き
長らんことを心に念じてペンを擱く。

丁度上の北村博士の発表文に図を作成
されたので原稿を御借りして本誌に挿入
した。同先生の一ならぬ御好意に對して
厚く御礼を申し上げたい。

末筆乍ら私の少年時代から色々御指
導御鞭撻を受けた。もと京大講師、故
田代善太郎先生の靈に對して厚く御礼を
申し上げたい。

なお今回、遠路京大植物教室総出で
て御指導を戴いた。北村、田川、廣江、
中井の先生並に宿舍の御世話も預つた
柏尾氏、又この新種の捜査に御協力願つ
た。本会員40余名の方々に感謝したい。

附記 当日の模様は岩谷成彦氏の雪彦
山植物採集記に詳細出ていますので省略
した。

{Sept. 10. 1949}

編 集 後 記

△皆様の御協力によつて物價高の今日
にも不拘らず、第4号を刊行することが
出来ました。御協力を深謝したい。

△又本号刊行に当り王子建築株式
会社社長曾我熊太郎氏は本会の主旨に
賛同され多大の御支援を得た。ため
に諸氏に本誌を御分けすることが出来
ました。毎号の御好意に重ねて感謝
したい。

△本号より会員諸氏の決議により百
舌欄を設けました

次号より、せいぜい御投稿を願ひ
度い。

△何時も赤字続きで困つて居り
ますから会費未納のは至急各支
部、或は明石市縣立明石高校
澁谷久雄宛送金願ひ度い。

△経費の捻出の一方法として
廣告を募つて居ります故、
消極的な編集子では、なかなか
手が廻らず困つて居ります故、
是非皆様の御協力、御支援を
願ひ度く重ねて懇願致し度い。